

オス朝時代に相当する。低水位が続いたにもかかわらず、王家が穀類の輸出によって富を得ることができた理由の一つは“サキヤ”と呼ばれる水車が発明されたことである。牛がのんびりと回す水車は近年に至るまでエジプトの農村風景にその姿をとどめた。

◆アスワンダム

ナイルの自然の営みに初めて人工の手が加わったのは、アスワンダムの建設である。多くの人々が村を追われ、遺跡は湖に沈む危機に晒された。幸い、ユネスコの呼びかけに応えた各国の協力で、アブ・シンベル大神殿は無事に移設されたが、遺跡の危機はこれだけに止まらなかった。沃土が運ばれなくなったために、ナイル河畔では遺跡の土や泥レンガが畑に投入され、大規模な遺跡破壊を招いた。これが法令で禁止されたのちは、大量の農薬が畑に撒かれるようになり、新たな不安が広がっている。また、地中の塩分を洗い流す溢流がなくなったことも、遺跡に深刻な被害を与えつつある。その被害はデルタ地域の遺跡だけでなく、中エジプトのアマルナ王墓でも、白カビのようにみえる塩が壁面に吹き出しているのが観察された。

さらに、ダムの水を西方砂漠に流して農地の拡大をめざすトシュカ計画が実施され、スーダンではナバタダムの建設が計画されている。このダムの予定地とその周辺ではすでに第1次の考古学調査が終了し、住民の移転計画が策定されている(Welsby and Anderson 2004)。最近の新聞報道

によれば、白ナイルの水源であるビクトリア湖の水位が、降雨量の減少と下流ダムへの過剰な流出によって急激に下がり、水草が繁茂した結果、マラリアが流行しているという(『朝日新聞』2008年3月9日朝刊)。気候変動によるナイルの水位の変化は古代エジプト文明の盛衰に大きな影響を与えたが、こうした現代の開発によって引き起こされる水位の低下は、エジプトのみならず流域諸国に深刻な問題を引き起こす可能性を否定できない。

【参考文献】

- Butzer, K. W. 1995: *Environmental Change in the Near East and Human Impact in the Land, Civilizations of the Ancient Near East*, New York.
- Edwards, D. N. 2004: *The Nubian Past: An Archaeology of the Sudan*, London, Routledge, Fig. 2.1.
- Hassan, F. 1986: "Holocene Lakes and Prehistoric Settlements of the Western Faiyum, Egypt," *Journal of Archaeological Science*, 13, pp.483-501.
- Kendall, T. 1996: *Excavations at Gebel Barkal*, Report of the Museum of Fine Arts, Boston, Sudan Mission, IN: Kush17.
- Rehren, Th. 2001: *Meroe, iron and Africa*, *Mitteilungen der Sudanarchaeologischen Gesellschaft* 12, pp.102-109.
- Welsby, D. A. and Anderson, J. R. eds. 2004: *Sudan Ancient Treasures, An exhibition of recent discoveries from the Sudan National Museum*.

(国士舘大学イラク古代文化研究所)

まとめ — 林 玲子

「環境」は、21世紀のキーワードである。繁殖しすぎたヒトが環境に悪影響を及ぼしている、という認識は、やや政治的に煽られている観があるが、人類の活動は環境に影響され、その逆も真である、というところに意義を挟む余地はないであろう。ナイル川流域の国を、ブルンディ、エジプト、エリトリア、エチオピア、ケニア、ルワンダ、スーダン、ウガンダ、タンザニアの9カ国とすると、

3億人程度、全世界の5%の人口を擁する地域である。いうまでもなくこの地域は人類の発祥地であり、人類と環境の相互作用について長期的な考察を可能にする地域である。

本パネルディスカッションでは、河川地理学、農学、建築学、考古学という、異なった分野、異なった時間軸における、それぞれの環境変化のインパクトについて発表され、議論された。

気候変動は、さまざまな時間軸で、確かに起こっているように見受けられる。しかし、それを人間との関わりで見ると、話は単純ではない。いわゆる「地球温暖化問題」といわれる、近代の人間由来の気候変動は、資源の配分からんだ政治的ともいえる意図が見え隠れしていることもあり、いまだ根強い懐疑論がある。単純に、年平均気温が1℃変化したからといって、それよりもはるかに大きい年間の気温変動を生き抜いている人類の生活が一変するか、という、まだまだ検討されるべき点は大きいかもしれない。11年周期で変化する黒点に応じて太陽エネルギーが変化すれば、地球規模での気候変化はありうるが、黒点の活動低下と連動している小氷河期(16世紀前後)といわれている時代は、ヨーロッパ地域の局所的な寒冷化が、全世界に共通であるとみなされた可能性もある。1万年前には氷河期が終わったとされているし、78万年前に起こったとされる地球磁場の反転も、気候に影響をもたらしたであろう。さらに億年単位の長い時間軸では、大気組成や大陸の配置、地球の軌道の変化といった気候変動要因がある。それらは、歴史学で解けるところから、考古学、さらには人類学でカバーできるところ、もはや人類の存在しない地質学の領域へと広がっていくが、異なった学問領域を並列に眺めることで、ある程度のバランス感覚は磨かれるはずである。

近代に至って人類が自然を大きく破壊したといひ、またその自然を保護しなければならない、というが、しかしたとえば、有名な東アフリカの「自然公園」は、その動物群で観光客を魅了するが、これとて本来の「自然」がそのまま残っているわけではなく、自然公園を設定した人々が来る前にそこ

に住んでいた人々を追い出すことにより成り立っているわけである。それはすでに「自然」状態から乖離している、といえるだろう。ロマンチックな響きを持つ「遊牧民」も、農耕民にとっては「自然破壊者」と映る。そうしたなかで、自然な環境とは一体何を指すのだろうか。

地質的な、もしくは考古学的な時間軸から考えると、経済的指標から見れば世界で最下位に位置するこの地域に外部からの力で「開発」を行うことに、本質的な意義はないかもしれない。たとえば、この地域の「開発度」が低いのも、もともとあった伝統社会でバランスが取れており、押し出されて新たな土地で技術を発達するしか生き延びる術がない新興地の集団と比べて、なんら技術開発の必要性がなかったからである、といったよう説明も可能だろう。とはいいいながら、近年この地域の「近代的」発展は目覚ましい。石油産出が1990年代後半から盛んになっているスーダンのもとより、そのような地下資源がないエチオピアも経済成長率は年10%に達する勢いである。ケニア、タンザニアは、すでにサブサハラアフリカの重要な先導役であり、政治的ないさかいが起こるのも、低所得から中所得に向かう道筋のなかでの「通過儀礼」的なものとも考えることもできる。世界の資金が新興国に流れるなか、いわゆる「最貧国」にもトリックルダウン効果が現れた、ということもできるが、いずれにせよ世界の多極化とグローバル化のこの流れは、逆行することはないのかもしれない。それが、新たな自然、環境をつくるのであろう。

環境からナイル・エチオピアを見たら、逆に環境とは何か、と考えさせられた。

(セネガル共和国保健予防省)